特集：ため池と生きる

～いざというときに強いまちづくりを～

ため池から地域を知る

ため池は農業用水の利用のほか、雨水を一時的に溜めて下流域水路などがあふれることを軽減したり、山からの土砂流出を防止したりする防災のはたらきがある。近年、地震や大雨により、ため池そのものが被災し、下流域に被害を与える事例があり、造られてから百年以上経過するため池が多いことから、ため池の安全への関心が高まっている。

山形市鈴川地区にある「沼の辺ため池」は、市街地の広がる国道13号線沿い、「市民の森」の中に位置している。鈴川地区の住民が集まり、沼の辺ため池が万が一決壊した場合に備え、住民参加型のワークショップ（以下、WS）により、ハザードマップの作成を行った。

WSは複数人の班に分かれて、浸水想定区域が着色された図面をもとに、自主避難を想定しての避難経路や危険な場所などを話し合う。

個々の住民が知る情報はふせんやシールを使って地図に盛り込まれ、地域全体で共有できる情報となる。

皆で守る まちと住民

お話を伺った中沢地区
区長　五十嵐 藤司 さん

朝日町中沢地区では数年前に全国でため池一斉点検がはじまった頃、地区内の西山ため池にも意識が向いて自主的にマップを作成。その後、行政と連携し改めて詳細なハザードマップを作った。

現区長の五十嵐さんは「危険な場所等分かる人が少なくなってきているので、ため池を再認識するとともに色々考えさせられた」と、当時のWSを振り返る。今でこそ米農家は減ってしまったが、冬の消流雪や畑仕事の際の洗い場、また防火の最終手段などとして、ため池の水は身近なのだそう。

マップ完成後は全戸に配布。以前自分達で作ったというマップは引き続き公民館の玄関先に貼られており、当時からの防災に対する意識の高さがうかがえた。中沢地区では今年は地域づくりのWSも行っており、「これからも地域で輪になって頑張っていきたい」とのこと。皆で地域について考えていくことが、災害にも強いまちづくりにつながっていきそうだ。

想定される被害規模を情報共有

- 自主避難するときの経路は？
- 情報伝達はどうやって？
- 一時避難場所は？
- 避難時に危険な場所は？

地域独自のマップが完成

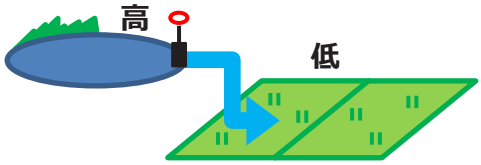
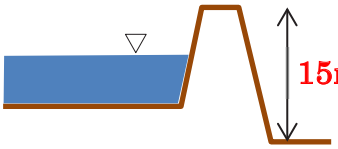
～ハザードマップとは～

ため池が決壊した場合に想定される被害規模や、避難行動等の情報を載せた地図。

「ため池」って？

ため池は普通の池や沼とはどう違うの？

ため池は水を蓄え、農地へ水を引いてくるという役割を持っている人工の池である。そのため、一般的には農地よりも高い場所に存在し、取水口がある。



農業用水を溜めるものとしては主にふたつ、ため池と農業用ダムがある。では、ため池とダムとの違いは？それは堤体の高さにある。十五メートル以上が「ダム」で、それより小さいものを「ため池」と呼んでいる。